

2020年9月5日

山口西田読書会 2020年8月29日のプロトコル

井町菜月記

1 テキスト

「表現作用」六。第一段落～第二段落。158頁1行目～161頁二行目まで。

2 テキスト解釈

(第1段落)

「五」において、意識統一の根柢が明らかにされた。「我々の自覚の根柢には、超意識的統一がある。我々の意識統一は之によって成立するのである。」(140頁)とあったように、自覚の統一の根柢には超意識的統一(或る一つの中心、影なき空間、生じて生ぜず動いて動かざるもの、真の一者、などと西田が表現するもの)がある。これを踏まえると、自覚的統一の上に成り立つ無限の「時」の背後にも真の一者があることになる。この一者は「三」で「時の背後に移り行かないものがなければならぬ」(145頁)と言われたときの「移行かないもの」に該当すると考えられる。次に西田は、この世界を永遠なるイデア界に似せるために「時」が作られたとするプラトンの考えを示し、時が永遠の相に入るのに表現作用が働いていると述べている。西田は表現作用を「自覚自身をも否定する自覚の深き根柢に於て現れ来る作用」であるとする。「自覚自身をも否定する自覚の深き根柢」とは、真の一者(真の直観の立場、働くものを包む働かないもの)のことであろう。自覚的統一は、機械的作用から合目的的作用、合目的的作用から意識作用へと根柢に還るに従って時の内容は充実するが、その最も深い根柢において、自覚自身を否定しているのである。

(第2段落)

西田は私と他者の間での思想の交換がどのように行われているかを考察する。我々は言語によって考えを伝達するが、言語は思想を運びえない。西田は人間精神の中には「本質的に共同的なるもの」(158頁)があつて、それを媒介に言語という符号を用いて通じ合っていると述べる。この「本質的に共同的なるもの」を西田は「表現其物」と述べている。

次に西田は言表によって客観化されることによって思惟が成り立つと指摘する。私の前の心と次の心とが相理解し合うためには、言語の表象や言語の代理をする何らかの表象が必要である。「他人との共同の場所」や少なくとも「自分自身の心の公の場所」(159頁)に持ち出されることにより、主観的なものが客観化させられ、思想は思想となる。このように、我々の思惟の根柢には言表の世界がある。このことから、純なる思想は「言語の世界」に宿っており、言語は思想の出立点かつ終点であるといえる。

我々は言表によって客観的精神の立場(客観的思想の立場)に立つことで、互いに理解し合うことが可能となる。言表によって自己の主観は客観的表現となり、思想が明瞭であればあるほど明瞭な言表をもつことになる。客観的精神の立場は主観と対立するものではなく、主観的精神を超越したもの(包むもの?)であり、それゆえ「客観的精神は言語に

よって自己の中に自己を映す」(160)といえるのだと考えられる。

物の概念を作るのも言語による。赤の表象から赤の概念を作る際、そこには命名作用が働く。命名作用によって、「赤」は表象作用を超越して意味の世界に入ることとなる。感覚が思惟の内容になる場合も同様に言表作用によって、感覚の意味化が行われている。「赤が赤である」と自己自身を言表した時、すなわち「赤」が意味の世界に入り、概念化（言語化）されたときに、「赤」は客観的なものとなる。